

1999年の本。

一般に、演技や演劇については、作為的で、作られたものというイメージがある。しかし、演技や演劇は奥行きが深い。演技力は、その人の人生経験の深さの反映である。演じる人の能力や技術をそっくり表すものである。だから、名優の演技に、人々は感動し、涙し、そして笑うのである。大根役者、すなわち無能な人の演技は人を感動させない。

結局、演技とは、その人がもっている能力そのものなのである。

話す技術と書く技術は、すなわち言葉の技術である。話す技術だけでは、論理が粗雑になり、詭弁を弄する詭弁家になる恐れがある。なぜなら、話したことは発した瞬間に空気の中に消えてなくなるからである。ところが、書いたことは数千年も記録として残る。論理の不備やエビデンス（証拠資料）の不足が明瞭明晰に残る。人をだますことができない。

早口コトバの練習

寿限無(じゅげむ) 寿限無(じゅげむ) 五劫(ごこう)のすりきれ 海砂利(かいじやり)水魚(すいぎょ)の水行末(すいぎょうまつ) 雲来末(うんらいまつ) 風来末(ふうらいまつ) 食(く)う寝(ね)るところに 住(す)むところ やぶらこうじの ぶらこうじ パイポ パイポ パイポの シューリンガン シューリンガンの グーリンダイ グーリンダイの ポンポコピーのポンポコナの 長久命(ちょうきゅうめい)の長助(ちょうすけ)

~~~~~

#### 【解説】

長い名前によって起こる笑いを主題とした古典落語の一節で、「寿限無」から「長助」までが、1つの名前です。寿限りなしで死ぬことのない「寿限無」、天人が三千年に一度下界に下るたびに衣で巖を撫で、巖を刷り切るのに要する時間が一劫からくる「五劫のすりきれ」、膨大で獲り尽くせない海の幸「海砂利水魚」、衣食住は欠かせず「食う寝る所に住む所」、生命力強靱な藪柑子「やぶらこうじのぶらこうじ」、昔、唐土にあった「パイポ」という国の「シューリンガン」王と「グイーリンダイ」後のあいだに生まれ超長生きした双生児姉妹の名「ポンポコピー」と「ポンポコナ」。長久と長命を合わせて「長久命」、長く助ける「長助」から成る名前です。

[https://www2.nhk.or.jp/school/movie/outline.cgi?das\\_id=D0005150386\\_00000](https://www2.nhk.or.jp/school/movie/outline.cgi?das_id=D0005150386_00000)

~~~~~

「エー言葉」を乱発しない

「エー言葉」というのは、「エー」「エート」「エートですね」「エットオー」などのことである。

その他のムダな表現

「あの一」「その一」

「いろいろ」・・・曖昧

「そういった」「こういった」・・・曖昧

最近の教養のない若者は、「～って感じ」「たぶん～」「ま、いっかあ」「よくわかんないけどおー」「まじ」「いいじゃん」「やっぱあ」「ウッソー!」「かわいい」などと、単語を羅列する程度でしか日本語を話せない。

「前提が正しく、推論も正しいと、結論は正しい」

「前提が誤っていると、推論がいかにも正しくとも、結論は誤っている」

韓国人は、植民地支配は絶対に悪であるという前提に立っている。しかし、植民地支配には悪もあるが善もある。この世の中に絶村というものはない。世の中は相対的である。善もあれば悪もある。長所もあれば短所もある。大きいと小さい、長いと短い、プラスとマイナスなどなど、すべて相対的である。これがディベートの根底にある弁証法の見方である。

物事を絶村視すると、思考は発展しない。思考はそこで停止してしまう。韓国の対日非難が不毛である原因はここにある。日本がやったこと、なすこと、すべて悪という前提では、何の議論も討論も成立しない。頭から結論を決めつけては、議論をする必要すらない。

「人を殺した瞬間に、殺人犯から人権は喪失する。殺された人間はこの世から消滅し、永久に人権がなくなるのに、どうして殺した方に人権があるのか。おかしいではないか。人権というのは普通の健全な市民にあるもので、殺人鬼にはない」

ある死刑囚は、自分の殺人を「無知と貧困が生み出した罪」と主張していた。しかし、これは自分の凶悪な殺人の罪を無知や貧困に論点をすり替えている。当人は意図したかどうか知らないが、この論点のすり替えに乗って、この死刑囚を人権擁護で応援した人は多い。

藤木「オイ、山田、ちょっと待て！（大きな声でどなりつける。上司の名前は呼び捨てである） さっきから聞いていると調子に乗って、てめえ、いいかげんにしろ！ この馬鹿野郎！ アホ！ バカ！ トロクソ、間抜け！ ・おー、辞めて

やるわ！ いつでも辞めてやるわ！ その代わり、ただでは辞めんぞ！ てめえの首を取ってから辞めてやる！ 俺は辞めるが、お前もただではすまんぞ！ 人権侵害で告訴してやるぞ！ 覚悟しろ！ このくそつたれ野郎め！ 私のオジサンは弁護士だ（実際そうである）。オジサンに相談したら、入社以来の私に対するあなたの態度や行動は、明らかに人権侵害だと言っていた。私のオジサンはものすごく怒っていたぞ。俺がそのアホな人間をやっつけてやるから、心配するな、早く告訴しろ、とまで言ってくれている。オイ、山田、人権問題で裁判となったらただではすまんぞ！ 親会社にも訴えてやる！ 馬鹿野郎！ おとなしくしてればいい気になって！ 徹底的にお前をやっつけてやる！ 社会的な制裁を加えてやる！ この社会から抹殺してやる！ 俺も辞めるが、てめえもクビにして路頭に迷わせてやるから覚悟しろ！」

タンカは一気にまくしたてる。一気呵成にどなりつけるのである。本当にキレタ、ブツンしたという、憤怒の形相で詰め寄ってどなることである。凄まじいまでの迫力がある。こういうケンカは、**度胸**しかない。後先を考えない迫力を見せることである。もちろん、憤怒の形相にも冷静な演出と計算がある。前後の見境がつかないというような**ド迫力を相手に見せる**ことである。こっちが決死の覚悟、死ぬ気になっている。何をするか分からないという恐怖心を相手に抱かせることである。もちろん、計算の上だから、タンカやセリフのキーワードは、どなりつけている間も、きちんと盛り込んで言うことである。これは練習と決死の覚悟があればできる。

殺人は一個の生命を奪うのである。一個の人権を奪うのである。奪われた生命と人権は二度と再生しない。このかけがえのない生命と人権を奪った犯人は、みずからの生命と人権を交換する以外に責任は果たせない。それが死刑である。**一個の生命と人権を奪った者は、自分の生命と人権を提供する以外に、同等の責任を果たす以外に選択肢はない。**